

バリ島におけるラフティング参加者のリスク認知に関する研究

- 日本人参加者に着目して -

山下雅彦（福山平成大学）

キーワード：バリ島のラフティング・ツアー，リスク認知，アドベンチャー・ツーリズム

1. はじめに

アドベンチャー・ツーリズムの定義とは，自然環境のもとでスリルや刺激を受けることを目的としたガイド付きのツアーである．このツアーは参加資格を問わない自然観察的なツアーから，難易度の高い山岳トレッキングといった専門性の高いツアーまで様々なものが存在する．このツアーでは，天候悪化による遭難や雪崩といった自然環境に起因する事故も発生している．こうした事故は，ガイドの能力だけで防ぐことが困難であり，ツアー参加者にもリスク管理が求められる．アドベンチャー・ツアーで行われる体験は，企画事業者からツアー開始前に参加者に対して「危険告知書」といった誓約書を確認させ，サインを求めることが多い．そうした活動では行為者自身によるリスク管理が前提となる．そのため，ツアー中の事故を防止するためには，参加者自身によるリスク管理も重要な要素となる．

しかし参加者にとって，自己の行動に伴い発生する危険をリスクとして認識するリスク認知ができなければ，参加者によるリスク管理は期待できない．特に海外での不慣れた環境下において参加者とガイドとの意思の疎通を欠く条件は計り知れない．そこで，本研究では，リスク管理の前提となるリスク認知に焦点を置き，アドベンチャー・ツーリズムにおける，参加者のリスク認知という点から調査を行った．

なお，調査対象地は，多くの日本人が訪れるインドネシアのバリ島（2008年の日本人訪問者数は世界一）で活動するS社のラフティング・ツアーに参加した日本人を対象に，リスク認知についてのアンケート調査を実施した．

2. 研究の背景

ラフティングとは，2～6名程度のグループでラフトと呼ばれるゴムボートに同乗し，参加者はガイドの指示のもとパドルを操って前後に漕ぎながら，ガイドが舵を取り急流を下るスポーツである．

ラフティング・ツアーは，登山などと異なり，ボートという限られた空間に参加者の行動範囲が限定されるため，アドベンチャー・ツアーの中でも，比較的ガイドがリスク管理しやすい体験活動である．

一方でラフティングでは，予期できない危険も伴うので，事故の発生確率も高い．実際に日本では，死亡事故が発生しているほか，報道されないような軽微の事故も多く発生している．

こうしたラフティングの事故については，ガイド個人の技術や事業者のリスクマネジメント体制が問題とされてきた．本研究では，参加者自身によるリスク管理を活用するという事故対策についての新たな視座を提案するものである．

3. 調査の概要

本研究では、多くの日本人が訪れるインドネシアのバリ島トゥラガワジャ川で活動するS社のラフティング・ツアーに参加した日本人を対象に、リスク認知についてのアンケート調査を実施した。事前に調査の趣旨をS社に理解いただき了解を得て行った。調査は2009年3月16日から20日までを実施期間とし、昼食時に調査の説明を行い、協力を得られた日本人ラフティング参加者を対象に行った。なお、今回の調査は参加者のリスク認知を調べる目的であるため、リスク認知に対する判断が難しいと想定される中学生以下の参加者については対象に含めなかった。

以上の方法で調査を実施した結果、586名の回答を得た。

4. 結果および考察

4-1 ラフティングのスリル

4-1-1 魅力としてのスリル

アドベンチャー・ツアーはスリルや刺激を受けることを目的とした観光であるが、ラフティング・ツアーでも参加者は本当にスリルを魅力と感じているのか検証した。「ラフティング・ツアーの一番の魅力は何か」という質問に対して、参加者全体の55%が「急流を下るドキドキ感・スリル」と回答している。

各年代の特徴をみると、10代から30代では「急流を下るドキドキ感・スリル」を一番の魅力と回答しているのに対して、40代から60代では「水上から見える景色」と回答しスリル以外のことに魅力を感じている人が増加することがわかる。

S社のラフティング・コースの特徴として、途中およそ3.5mの堰堤をボートで下り、切立った岸壁から流れ落ちる滝を横目に見ながら下ることである。また、大規模なライス・テラス（棚田）などを含め雄大な自然を満喫できることが年齢層に応じた楽しみを演出できることからこのような結果になったと考えられる。

さらに、性別毎に分類すると、「急流を下るドキドキ感・スリル」を回答したのは男性44%に対し、女性では56%と高まっている。このことから、女性のほうがスリルに対する期待感も大きいこともわかった。

以上のことから、ラフティング・ツアーでは、参加者にとってスリルが魅力となっておりるとともに、若年層及び女性にはスリルを目的として参加する人が多いことが明らかになった。

4-1-2 スリルとリスク

本調査では、「体験前にラフティングは危険を伴うと思っていたか」との質問に71%の参加者が「思っていなかった」と回答している。また、「ガイドに任せておけば危ないことはほぼ起きないと思うか」との質問に対しても、86%の参加者が「そう思う」と回答している。

このことから、参加者は当初からリスク管理をガイドに依存し、安全が保障されているツアーであると認識していることがわかる。つまり、参加者の多くは、本来体験に伴い発生し自分で対処しなくてはならないリスクの存在を、ガイドに依存することによって、リスクについて意識することなくスリルだけを感じるようになっていいると考えられる。

4-2 参加者の危険認識

4-2-1 ガイドの指示

前述のとおり、参加者の多くはスリルを求めラフティング・ツアーに参加する。従って、多少の危険な状況でも果敢に挑戦したいと感じる参加者も多い。「危険箇所を回避する方法についてガイドの指示することが、わかりましたか」との質問を行ったところ、「よくわからなかった」の項目を71%の参加者が選択した。また、「体験をしてみてラフティングは危険だと思いましたが」との質問に対して、53%の参加者がラフティングは「安全な体験である」と回答している。

これらの質問から、参加者にはラフティング・ツアーに伴う危険認識が少ないことがわかる。参加者の危険認識の少なさは、英語によるガイドの指示が適切に伝わっていないということも考えられるが、ツアー参加前の募集段階において危険告知に対するアナウンスがしっかりできていない為、参加者側にも危険を認識できない要因があると考えられる。

4-2-2 参加者の経験レベル

そこで、参加者のラフティング・ツアーの計画を特性ごとに分類し、調査することにした。「ラフティング・ツアーをどの段階で計画しましたか」という質問に対する回答を、参加者のラフティング経験別に分類した。ラフティング経験者と未経験者では計画の段階から大きく異なり、78%の未経験者が「バリ島到着後、ラフティング・ツアーを計画した」に対し、84%の経験者は「日本で事前に予約した」と回答している。

多くの未経験者はビーチサンダルでラフティング・ツアーに参加しているのが見受けられた。ビーチサンダルでは、ボートからの転落時に脱げる可能性が高く怪我もしやすいと考えられる。このことから、参加者が危険を認識できない要因には、参加者のもつ特性または経験レベルが影響していることがわかる。

4-3 企画事業者による危険告知

4-3-1 危険告知書の効果

ラフティング・ツアーでは、ツアー開始前に、参加者に対して危険告知書といった誓約書を確認させ、サインを求めることが多い。これはアドベンチャー・ツアーの特徴である「自然の中での体験であり、ガイドの予測がつかない事態が発生する可能性がある」ことを参加者に理解してもらい、リスク認知を高めるために使用するものである。しかし、本調査では前述のように86%の参加者が「ガイドに任せておけば危険なことは起きない」と考えており、多くの参加者が危険告知書に明記してある内容を理解していないことが明らかになった。

4-3-2 セーフティ・トークの効果

本調査では参加者全体の68%がセーフティ・トークを「理解できなかった」と答えた。また、「実際に危険な場面にあったら指示通りに対応できたと思うか」との質問には、「理解できなかった」参加者のうちの52%の参加者が「対処できないと思う」もしくは「わからない」と回答した。つまり、理解できず行動につなげることができない参加者が52%いるということになる。

事故防止の目的で実施するという観点から考えた場合、全ての観光客にセーフティ・トークの効果が現れなければならない。従って、現状では適切な方法で実施されているとは

言えない。これは、バリ島のラフティング・ツアーには世界各国の参加者が集まり、ラフティング・ボートに乗船するグルーピングの際には同国同士になるとは限らず、ガイドの使用言語は英語となる。このことから、セーフティ・トークを効果的に行うためには、参加者の特性を無視した画一的な説明では不十分である。

5. 結 論

本研究では、観光におけるラフティングの現状を整理したうえで、バリ島での調査結果から、参加者のリスク認知の現況を分析した。そして、スリルが魅力となることによってリスクに対する認識が不足していることともに、企画事業者による危険告知が効果的でないことを示した。

筆者は、ラフティング・ツアーのガイドとして、また、ガイド養成の講師として長年携わってきた経験から提言を行いたい。

バリ島のラフティング・ツアーにおいては、参加者のリスク認知能力を考慮しなくてもよい、ガイド主導のリスク管理によるツアーが行われている。これらは企画事業者が参加者の行動を管理しやすい大衆観光型のラフティング・ツアーである。

こうしたアドベンチャー・ツアーの大衆観光化は、ラフティング・ツアーに限定されたことではない。いわゆる「体験型観光」として観光ガイドブックに掲載されるようなツアーの多くは、参加者によるリスク管理がほとんど排除されており、同様に大衆観光化していると考えられる。

川という自然を相手にしたスポーツでは、上流の降雨による増水、川の中の障害物による流れの変化、コース内に数ヶ所ある竹で作った低い橋脚や堰堤の人工構造物など様々な不確定要素が多くそれに伴い発生する危険は、いわば付きものと言ってもよく一般的な観光を目的とするツアーとは本質的に違っていることを、企画事業者をはじめ参加者双方に再認識させる必要がある。

バリ島観光を案内する雑誌や旅行ガイドでは、ラフティング・ツアーが盛んに宣伝されており、今後もバリ島へ集まる参加者は増加し、その大半が未経験者である可能性が高い。さらに参加者の78%が、「ラフティング・ツアーが初めてで不慣れ」であることから考えても、より一層未経験者対策は重要であると考えられる。もちろん未経験者側の自覚やパドリング技術も求められていることは明白であるが、それ以上に企画事業者でも対策を講じることが望まれる。このことが、事故を未然に防止する効果的役割を果たすことになると考えられる。

参考文献

- 1) 稲葉正思 (2008) アドベンチャー・ツーリズムにおけるリスク管理責任と観光客の主体性, 北海道大学観光創造フォーラム「ネオツーリズムの創造に向けて」報告要旨集, 北海道大学, 117-120.
- 2) 大石示朗 (1999) スキューバダイビング事故と指導者の法的責任, 東京女子体育大学紀要 34, 12-19.
- 3) 中田誠 (2002) 『ダイビング事故とリスクマネジメント』, 大修館書店, 35.
- 4) 古澤照幸 (2004) スリル構造についての考察, 埼玉学園大学紀要 4, 25-34.
- 5) Farley, F.H. (1986) The big T in personality. *Psychology Today*, May, 44-53.
- 6) 山下雅彦 (2006) 大学体育におけるリバーレスキュープログラムの実践, 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 6, 165-171.